奈良・平城京東市跡推定地

1　所在地　奈良市東九条町

2　調査期間　第二七次調査　二〇〇一年（平13）一〇月～一一月

3　発掘機関　奈良市埋蔵文化財調査センター

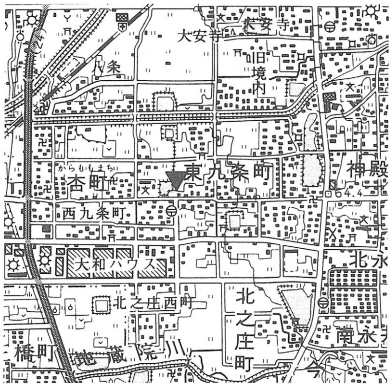
4　調査担当者　中島和彦

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　奈良時代～平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

東市跡推定地の四つの坪（左京八条三坊五・六・十一・十二坪）の内、今回の発掘区は十二坪の西端で坪の南北中央ラインのやや南側にあたる。十二坪内の発掘調査は今回が初めてである。



（桜　井）

検出遺構には奈良・平安・鎌倉時代のものがあり、奈良・平安時代の遺構には、掘立柱建物九棟、井戸一基、土坑四基がある。

掘立柱建物の密度は高く、重複関係から五時期以上ある。いずれの建物も発掘区外につづき全体が明らかなものはないが、柱掘形の規模から中小規模の建物と推定される。出土土器から八世紀中頃から九世紀初めのものと考えられる。

木簡が出土したのは井戸SE五〇二である。方形縦板組横桟留の井戸で、井戸枠は内法で一辺約〇・八m。枠は上から約一m分が腐食で失われ、そこから下の部分が残る。深さ約二・六mまで掘削したが底には到らなかった。縦板には大小さまざまな形の板が数枚重ねて使用され、あり合わせの材料で作った雑な印象である。縦板は横桟のある二カ所のみ崩れずに残り、横桟の間は土圧で内側に折れ曲がる。掘形は平面方形で南北約二・四m東西二・一m以上。枠内からは木簡五点を含め多数の遺物が出土した。土器は土師器、須恵器、黒色土器があり、墨書土器も二九点ある。墨書は「鯛」二点、「種」一点のほか、記号「⊠」が一一点以上ある。「鯛」の墨書土器は発掘区の北約一五〇mの第一二次調査でも出土しており、その関連がうかがえる。他には和同開珎一点、神功開宝二点、手斧、釘、斎串二点、横櫛三点、箸多数、動物遺存体、植物遺存体がある。出土土器から、井戸の年代は八世紀末から九世紀初めの時期と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□　(72)×(11)×1　081

(2)　□□□□□□……□□　091

(3)　□　091

(4)　□□　091

(5)　□□　091

(2)～(4)は削屑で、長さ三二～七八㎜ある。(5)も削屑だが長さ一二五㎜あり比較的厚めの削屑である。(2)は直接は接合しない二片からなるが、同一簡と判断した。いずれも文字は判読できない。

9　関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成一三年度』(二〇〇三年刊行予定)

(中島和彦)